

## 日本語学習者の産出する関係節の特徴についての考察

矢吹ソウ 典子  
ヨーク大学

### 要 旨

本研究は、日本語学習者が産出した関係節の分析を元に、第二言語としての関係節の使用頻度の低さの要因を探るものである。三つのレベルの日本語学習者（母語は英語・中国語・韓国語）合計 89 名の作文に現れた関係節を収集し、日本語母語話者による作文中の関係節をデータベースとして分析した。結果として、（1）日本語学習者の産出した関係節は母語話者の関係節に比べると全般に短く、レベルが上がるごとに長くなっていること、（2）学習者の関係節は文頭に来るものが多く、その傾向はレベルが上がると弱まっていくこと、（3）学習者の母語により、関係節の長さや使用される位置に違いが見られること等が分かった。日本語学習者は「重い」構成要素としての関係節に、負担の原因となる長さや文中での位置を加減・調節することで対処しているのがうかがえる。日本語教師は学習者のレベルや母語を考慮に入れ、比較的長い関係節が文中どの位置でも使えるよう指導する必要があると言える。

### 1. はじめに

日本語の関係節—例えば「私が日本語を習った先生」といった表現—は、第二言語としての日本語の教室では通常初級レベルの後半に導入される。それまで主に単文を羅列していた学習者が、自分が表現したい事がらを複文を用いてより深く表そうとする際の重要な文法項目である。関係節を使えるということが、学習者が次のレベルに進むためのカギのようなもの一つになっていると言える。

しかし「関係節化」というのは通常複雑なルールを伴うため、第二言語習得の分野では一般にどの言語でも習得の難しい言語項目の一つと考えられている。関係節を使わなくても基本的なコミュニケーションはこと足りるので、学習者はその使用を「避ける」傾向にあるということは Schachter (1974) が英語の学習者についてかなり以前に指摘しており、日本語の場合も、母語話者に比べると学習者の使用する頻度は極端に低く、用法もごく限られていることが報告されている (齋藤 2002、増田 2000 等)。では、具体的にどのようなことが関係節の使用頻度に影響を及ぼしているのだろうか。

本研究は、異なったレベルと母語の日本語学習者が作文中で産出した関係節の特徴を分析し、第二言語としての関係節の使用頻度の低さの要因を探るものである。

## 2. 背景

### 2.1 日本語の関係節の特徴

日本語の関係節の主な特徴には、(1) 修飾節が被修飾名詞の前に来る、(2) 英語のような関係代名詞 (which, where, who 等) は用いられない、(3) 節の内部では助詞の省略が起きる等があり、結果的に、例えば英語と日本語の関係節は例 1 のように語順等がお互いに非常に異なる形を取ることになる<sup>(1)</sup>。

- (1) the students [who are studying Japanese at the university]

[大学で日本語を勉強している]学生

また、上記 (2) と (3) の理由で、英語等の関係節とは異なり日本語の関係節では修飾節と被修飾節名詞の文法関係は明示されない。さらに日本語の関係節は、英語等ではそれぞれ別の構造とされる同格節とも同一の構造

をなし、制限・非制限用法の形式上の区別もない<sup>(2)</sup>。したがって、基本的に日本語の関係節や名詞修飾節は、理解の面からは手がかりが少ないということになるが、実は産出の面では、関係節化のルールが複雑な英語等他の言語に比べ「どのようなタイプの修飾節も同じように作ればよい単純な構造」(大関 2008: 134)だと考えられる。しかし、日本語の関係節には上記のような英語等とはかなり異なった類型論的特徴があるため、第二言語として日本語を学ぶ学習者にとっては習得の際に努力を要する文法項目の一つであると言えよう。

## 2.2 構成要素の「重さ」

日本語学習者の関係節の使用頻度の低さの原因として、Kanno (2009) は、関係節の構造的な「重さ」が関与している可能性を考察した。Kanno は、Arnold 他 (2000) および Yamashita (2002) に基づき、構成要素の重さを量る決め手になる要因として、その要素の長さで構造的複雑さの二つを挙げている。

Arnold 他 (2000: 28) は、英語のように規範語順が比較的固定されている言語においても別の語順が許される場合があることを、次のような例を用いて示している。

- (2) a. The waiter brought the wine [we had ordered] to the table.  
b. The waiter brought to the table the wine [we had ordered].

英語では例 2-a のように他動詞 ‘brought’ の直接目的語 ‘the wine’ は到着地点を表す句 ‘to the table’ の前に置かれるのが規範語順だが、直接目的語が「重い」構成要素である名詞節を伴う場合、例 2-b のように文の終わりに来ることがある。これを受けて Kanno (2009: 128) は、修飾節前置型で動

詞が文末に来る日本語の場合、例 3 のように従属節を含む文では、節の部分が英語の場合とは逆に文頭へ移動することを指摘している。

- (3) a. ジョンがメアリーに [スーザンが会社を辞めた] と言った。  
b. [スーザンが会社を辞めた] とジョンがメアリーに言った。

また、Yamashita (2002) は、話し言葉と書き言葉両方の四種類のさまざまなコーパスを用い、日本語の文の非規範的な語順が起こる要因を詳しく調査した。その結果、非規範語順を引き起こす節は、一般に「長い」（平均 5.6 語程度）ということ、また構造的に複雑（従属節か関係節を含む構造）であるということが分かった。例 4 (Yamashita 2002: 604) では、「重い」構成要素である関係節の部分が、日本語においては文頭へ移動する。同例文の規範語順は、「彼は[私が覚えている]話をすっかり忘れているかもしれない。」である。

- (4) [私が覚えている]話を彼はすっかり忘れているかもしれない。

Kanno 自身の研究では、英語が母語の上級日本語学習者を対象とした二つの発話データを用いて、発話中に使用された関係節を多方面から分析した。その結果として、日本語学習者が使う関係節は、母語話者の関係節に比べ、全般に短いということ、さらに文頭の部分で使用される頻度が高いということを報告している。これについて Kanno は、英語母語話者が即時的に使用する日本語関係節には、その構造的複雑さと日本語の関係節が前置型であることが影響し、使用頻度の低さの原因になっているのではないかと結論づけている。

それでは、即時的な発話中に産出された関係節に比べ、文を組み立てるのに時間的な余裕があると思われる日本語学習者の作文中の関係節にも、

はたして Kanno 他の結果と同様の傾向が認められるだろうか。また、学習者の異なったレベルや母語により、産出される関係節の特徴にはどんな違いがあるのだろうか。

### 3. 本研究

#### 3.1 研究の概要

本研究では、大学の日本語コースに所属する学生による作文中で使用された関係節の特徴を、日本語母語話者の書いた作文をベースデータとして分析した。Kanno (2009) に基づき、構成要素の長さや構造的複雑さを「重さ」の要因とみなした場合、作文中で使用された関係節はその長さや文中での位置に (1) 日本語学習者と母語話者の間でどのような違いがあるか、さらに (2) 学習者のレベルと母語によってどれだけの差が見られるかを調査した。

対象にしたのは、大学の日本語コースの 1 年生 (JP1000) ・ 2 年生 (JP2000) ・ 3 年生 (JP3000) の学習者それぞれ 33 名・32 名・24 名の計 89 名が作文中で産出した関係節である<sup>(3)</sup>。学習者の母語は、英語・中国語・韓国語で、それぞれ 27 名・32 名・30 名であった。また、2010 年 5 月 5 日から 6 月 12 日までの新聞コラム (朝日新聞「声」および読売新聞「気流」) より、18 歳から 24 歳までの日本語母語話者 32 名による作文で使用された関係節を収集した。そして、学習者および母語話者の作文中に現れたすべての関係節をそれが埋め込まれた文と共に抽出し、分析した。

#### 3.2 研究対象項目と分析方法

研究の対象とした関係節は、Kanno (2009) に従い基本的に動詞を伴う節のみ、また修飾節と被修飾名詞の間に格関係が見られるもののみを扱った。例えば、「本を読んでいる学生」は、主格の助詞「が」を加えて「学生が本を読んでいる。」という元の文に戻すことができ、この関係節は主

語の種類に分類できる。直接目的語の「きのう読んだ本」（元の文は「きのう本を読んだ。」）、その他の種類も同様である<sup>(4)</sup>。これに対し、例えば「何かが落ちる音」は、元の文に戻すことができない。この種の寺村（1992）が「外の関係」と呼ぶ連体修飾節、および「事故があったこと」のように形式名詞「こと」「ため」「とき」等を被修飾名詞とするもの、形容詞や形容動詞が修飾節になっているもの（例えば「背が高い人」「寿司が好きな人」等）は対象から除外した。尚、データ全体に対し数は少なかったが、学習者の文法的エラーを含む関係節も対象に入れた<sup>(5)</sup>。

分析方法の概要としては、まず関係節の長さは、対象とするグループごとに、助詞も一単語として数えた単語の総数を出し、産出された関係節の総数で割って平均値を出した。また、関係節の長さに関連し、構造的種類を見るために、多重構造などの関係節がどのくらい使われているかも合わせて調査した。次に、関係節が主節内のどの位置で使用されているかを、文頭かそれ以外かに分類してグループごとに集計した。さらに、関係節が主節内でどんな文法的役割を持っているかを調べるため、主語・目的語・名詞述語文の述部名詞などに分類してそれぞれ集計した。これらの結果を、学習者と母語話者間、また学習者のレベルごとおよび母語別に比較した。

### 3.3 結果

データに使用した作文中、日本語学習者 89 名は合計 246 個、母語話者 32 名は合計 125 個、一人平均それぞれ 2.8 個と 3.9 個の関係節を産出した<sup>(6)</sup>。表 1 は、学習者（レベル別・母語別）と母語話者の関係節の合計と一人当たりの平均個数を表す<sup>(7)</sup>。これらの関係節の特徴を以下で詳しく分析・考察していく。尚、それぞれのグループの人数の合計が異なるため、グループ間の相違は主としてパーセンテージで比較する。

表1 作文中に現れた関係節の個数

		個数	一人平均
レベル別	JP1000 (n=33)	48	1.5
	JP2000 (n=32)	90	2.8
	JP3000 (n=24)	108	4.5
母語別	英語 (E) (n=27)	63	2.3
	中国語 (C) (n=32)	85	2.7
	韓国語 (K) (n=30)	98	3.3
学習者合計	<b>(n=89)</b>	<b>246</b>	<b>2.8</b>
母語話者	<b>(n=32)</b>	<b>125</b>	<b>3.9</b>

### 3.4 分析

#### 3.4.1 関係節の長さ と 構造的種類

表2は、作文中で産出された関係節の長さの結果を示す。レベル別及び母語別に、関係節内の助詞を入れた単語数の合計を、産出された関係節の個数で割って出した平均値である。

表2 作文中で使用された関係節の語数・個数・平均の長さ

	語数 (内容語 + 助詞)	個数	平均の長さ
JP1000-E (n=10)	59 (=46+13)	13	4.54
JP1000-C (n=12)	89 (=68+21)	19	4.68
JP1000-K (n=11)	83 (=60+23)	16	5.19
<b>JP1000 計 (n=33)</b>	<b>231 (=174+57)</b>	<b>48</b>	<b>4.81</b>
JP2000-E (n=10)	94 (=74+20)	23	4.09
JP2000-C (n=11)	133 (=99+34)	26	5.12
JP2000-K (n=11)	210 (=161+49)	41	5.12
<b>JP2000 計 (n=32)</b>	<b>437 (=334+103)</b>	<b>90</b>	<b>4.86</b>
JP3000-E (n=7)	131 (=100+31)	27	4.85
JP3000-C (n=9)	214 (=156+58)	40	5.35
JP3000-K (n=8)	226 (=171+55)	41	5.51
<b>JP3000 計 (n=24)</b>	<b>571 (=427+144)</b>	<b>108</b>	<b>5.29</b>
学習者合計 (n=89)	<b>1239 (=935+304)</b>	<b>246</b>	<b>5.04</b>
母語話者 (n=32)	<b>873 (=623+250)</b>	<b>125</b>	<b>6.98</b>

\* E=英語母語話者、C=中国語母語話者、K=韓国語母語話者

この結果から、日本語学習者の産出した関係節は、母語話者の関係節に比べると全般に短いことが分かる。母語話者の平均が 6.98 語なのに対し、学習者全体の平均の長さは 5.04 語となっている。ちなみに Kanno (2009) の結果では、日本語母語話者の関係節の長さの平均は 4.13 語で、二つの発話データの平均は 2.33 語と 2.62 語であった。発話の場合ほどの大きな差はないが、作文でも母語話者と学習者の間には関係節の長さの違いがあると言える。さらに、学習者のレベル別の関係節の長さの平均は、JP1000 が 4.81 語、JP2000 が 4.86 語、JP3000 が 5.29 語と、レベルが上がるごとに少しずつ長くなっていることが分かる。しかし、韓国語が母語の学習者に関してはこの傾向は見られなかった。韓国語母語話者が産出した関係節の平均値は、三つのレベルが下からそれぞれ 5.19 語、5.12 語、5.51 語となっており、初級の段階から比較的長い関係節を用いていることが明らかになった。

この産出された関係節のうち、長さに加えて構造的種類を見るため、三種類の節の使用数を調査した。例 5 は、a. 関係節が単独で文中に現れているもの、b. 多重構造の関係節、つまり節の内部にもう一つの従属節が入っているもの、c. 関係節の後に形容動詞などが加えられて修飾節を構成しているものの例をそれぞれ示す。

- (5) a. [その時をいっしょに過ごした]友達 (JP2000 韓国語母語話者)  
 b. [[生まれた]赤ちゃんをすてる]女性 (JP3000 英語母語話者)  
 c. [自分を証明する][何より有力な]証拠 (JP3000 中国語母語話者)

表 3 はこれら三種類の関係節の使用数をレベルごとに比較したものである。結果として、日本語母語話者には割合頻繁に使われる多重構造の関係節および関係節に別の節が加わった構造は、JP1000 のレベルでは全く見られ

ず、上のレベルでも JP2000 で計 2 例、JP3000 で 6 例と、ほとんど使用されていないことが分かる。この結果は Kanno のものと同様である<sup>(8)</sup>。

関係節の長さや構造的種類に関してまとめると、日本語学習者の使用する関係節は、母語話者に比べて「短い」のに加え、構造面では主に単独の節を用いていることが分かった。

表 3 作文中での三種類の関係節の使用数

	単独の関係節	多重構造の関係節	関係節 + 別の節
JP1000 (n=33)	48	0	0
JP2000 (n=32)	88	1	1
JP3000 (n=24)	102	4	2
母語話者 (n=32)	108	14	3

### 3.4.2 関係節の位置と文法的役割

次に、作文中で産出された関係節の主節における位置を見ていく。収集したすべての関係節を、例 6 に示すように主節内での位置に基づき「文頭」「文頭以外」に分類した。

- (6) a. [きのう読んだ]本はおもしろかった。 文頭  
 b. 私は[きのう読んだ]本を友だちに貸した。 文頭以外  
 c. [きのう読んだ]本を（私は）友だちに貸した。 文頭  
 d. これは [きのう読んだ]本だ。 文頭以外

次の例 7 のような文における関係節の位置の識別は、基本的に大関（2008）の分類法に従った<sup>(9)</sup>。例えば、7-a のように修飾節を含む主節が複文構造の一部を構成している場合、その節の初めに修飾節が配置されていれば「文頭」とする。また、修飾節の前に置かれた要素が 7-b のように文を構成する補足語や主題である場合は「文頭以外」、7-c のようにその他の接続詞や陳述の副詞である場合は「文頭」とした。つまり、7-b では文を構

成する補足語としての「今朝」の後に関係節が割り込んでいるのに対し、7-c はそれ以前の文に基づく接続詞「だから」の後で関係節を含む文が新たに始まったと見なすこととした。

- (7) a. 今朝学校へ行く前に、[きのう読んだ]本を図書館に返した。文頭  
 b. 今朝、[きのう読んだ]本を図書館に返した。文頭以外  
 c. だから、[きのう読んだ]本を図書館に返した。文頭

作文中で使用された関係節の主節における位置を上記の方法で分類した結果を、グループ別に表4に示す。

表4 作文中の関係節の文頭と文頭以外での使用割合

	関係節の数	文頭	文頭以外
JP1000-E (n=10)	13	10 (77%)	3 (23%)
JP1000-C (n=12)	19	15 (79%)	4 (21%)
JP1000-K (n=11)	16	8 (50%)	8 (50%)
<b>JP1000 計 (n=33)</b>	<b>48</b>	<b>33 (69%)</b>	<b>15 (31%)</b>
JP2000-E (n=10)	23	13 (57%)	10 (43%)
JP2000-C (n=11)	26	14 (54%)	12 (46%)
JP2000-K (n=11)	41	18 (44%)	23 (56%)
<b>JP2000 計 (n=32)</b>	<b>90</b>	<b>45 (50%)</b>	<b>45 (50%)</b>
JP3000-E (n=7)	27	10 (37%)	17 (63%)
JP3000-C (n=9)	40	16 (40%)	24 (60%)
JP3000-K (n=8)	41	11 (27%)	30 (73%)
<b>JP3000 計 (n=24)</b>	<b>108</b>	<b>37 (34%)</b>	<b>71 (66%)</b>
<b>学習者合計 (n=89)</b>	<b>246</b>	<b>115 (47%)</b>	<b>131 (53%)</b>
<b>母語話者 (n=32)</b>	<b>125</b>	<b>59 (47%)</b>	<b>66 (53%)</b>

まず全体では、学習者の使用する関係節は、母語話者の関係節とほぼ同じで、文頭と文頭以外に位置する割合が共に 47%と 53%であった。しかし、学習者のレベル別の使用割合を比較してみると、文頭に来る割合は

JP1000 で 69%と特に高く、JP2000 では 50%、JP3000 では 34%と、レベルが上がるごとに減り、文頭以外の割合が増えている。JP3000 のレベルでは、母語話者以上の割合で文頭以外の位置で関係節が使われていることが分かる。ただし、使用割合を母語別に比べてみると、韓国語が母語の学習者に関しては、下のレベルから順に 50%、56%、70%と、初級の段階から半分以上の割合で文頭以外の位置で関係節が使用されている。特に JP1000 のレベルでは英語・中国語母語話者の 23%・21%に対し、倍以上の高い割合であり、韓国語母語話者はレベルに関わらず文中の比較的様々な位置で関係節を用いていることを示している。

次に、作文中で産出された関係節の主節における位置に関連し、これらの関係節の被修飾名詞が主節内でどのような文法的役割を持っているかを調べた。日本語の文では主語が省略されたり主語以外の補語を文頭に置くことも可能であるので、位置と役割の関係をさらに調査するためである。関係節の被修飾名詞の主節内での役割を、例 8 のように、主語・目的語・斜格・所有格・名詞述語文の述部名詞・独立名詞句・その他（副詞節など）に分類した。

- (8) 主語： [きのう読んだ]本はおもしろかった。  
目的語： 私は[きのう読んだ]本を友だちに貸した。  
斜格： 私は[きのう行った]レストランへまた行った。  
所有格： [きのう会った]友だちのお母さんが来た。  
述部名詞： これは[きのう読んだ]本だ。  
独立名詞句： [きのう読んだ]本。  
その他： [きのう会った]人のようにきれいになりたい。

表 5 は被修飾名詞の主節内でのこれらの役割を、レベルごとに集計した結果である。

表5 主節における被修飾名詞の役割ごとのグループ比較：レベル別

	主語	目的語	斜格	所有格	述部 名詞	独立 名詞句	その他	合計
JP1000 (n=33)	30 (63%)	7 (15%)	3 (6%)	3 (6%)	5 (10%)	0	0	48
JP2000 (n=32)	37 (41%)	10 (11%)	18 (20%)	3 (3%)	20 (22%)	0	2 (2%)	90
JP3000 (n=24)	39 (36%)	19 (18%)	18 (17%)	7 (6%)	25 (23%)	0	0	108
母語話者(n=32)	44 (35%)	23 (18%)	25 (20%)	13 (10%)	11 (9%)	6 (5%)	3 (2%)	125

全体的にどのグループも関係節を主語として使用している割合が高いが、JP1000 はそれが特に顕著である。JP2000・JP3000・母語話者がそれぞれ41%・36%・35%の割合で主語として関係節を用いているのに対し、JP1000 の同割合は63%となっている。ただし、関係節の主節内での位置も合わせて結果を見ると、JP1000 と JP2000 の学習者の「文頭」の割合（それぞれ69%と50%—表4の各レベルの「文頭」の割合を参照のこと）は、同じ二グループの主語の割合（63%と41%）を上回っており、主語以外の補語も文頭に置かれていることが分かる。ちなみに、JP1000 では3例、JP2000 では19例の関係節が主語以外の補語として文頭で使用されていた。さらに、母語話者に比べ、JP2000 と JP3000 の学習者は関係節を名詞述語文の述部名詞として使っている割合が高いことが分かった。母語話者が9%なのに対し、JP2000 では22%、JP3000 では23%の関係節が述部名詞として使用されていた。これは、Kanno (2009) とは異なる結果になっている。同研究では、二つの発話データのうち、一つでは述部名詞としての関係節は一例も見られなかった。同様に、Ozeki & Shirai (2007) は第一言語としての日本語関係節の子供の発話データを分析し、英語が第一言語の子供の同様のデータに比べると、述部名詞として使用する割合がかなり低かったことを報告している。しかし本研究の結果はこの二つの研究とは異なり、日本語学習者は関係節のまとまりを主に主語として文頭に置く割合が高いのに加え、述部名詞として文末の方に持ってくる傾向もある

ことを示している。成人学習者の作文の関係節では発話や子供のデータとは違った側面が見られ、興味深い。

次に、関係節の被修飾名詞の主節における役割を学習者の母語別に比較したものを表 6 に示す。

表 6 主節における被修飾名詞の役割ごとのグループ比較：母語別

	主語	目的語	斜格	所有格	述部 名詞	独立 名詞句	その他	合計
英語 (n=27)	32 (51%)	10 (16%)	10 (16%)	1 (1%)	10 (16%)	0	0	63
中国語 (n=32)	37 (44%)	14 (16%)	12 (14%)	2 (2%)	20 (24%)	0	0	85
韓国語 (n=30)	37 (38%)	12 (12%)	17 (17%)	10 (10%)	20 (20%)	0	2 (2%)	98
母語話者(n=32)	44 (35%)	23 (18%)	25 (20%)	13 (10%)	11 (9%)	6 (5%)	3 (2%)	125

母語別のグループで見ていくと、関係節を主語として使っている割合は、英語母語話者と日本語母語話者がそれぞれ 51%と 35%と、この二グループ間で最も差が大きかった。また、韓国語母語の学習者は、特に英語が母語の学習者に比べ、関係節を比較的さまざまな役割として使用しており、日本語母語話者のパターンと似ていることが分かる。レベル別に見た時と同様に、述部名詞として使われている割合はどの母語話者の場合も日本語母語話者に比べて高くなっている。

関係節の主節内での位置と文法的役割に関してまとめると、日本語学習者の使用する関係節は、母語話者に比べて JP1000 のレベルで文頭に来る割合と主語として使われる割合が高かった。また、JP2000 と JP3000 のレベルでは、述部名詞として使用される割合が母語話者を大きく上回った。さらに、韓国語の母語話者の結果は、全般に日本語母語話者と似たものになっていることが分かった。

### 3.4.3 その他の留意点・特徴

上記の他に留意すべきことは、JP1000 の学習者が産出した関係節の一部は、教材の影響を受けて定型的な使われ方をしている可能性があることである。例えば、JP1000 の教材 (Ota 2010) に「きのうひこうきの中で見たえいがおもしろかったよ。」という例文が出てくるが、同レベルの学習者の作文に「先週図書館で読んだ本はおもしろかった。」や「先月日本りょうり屋で食べたすしはおいしかった。」といった表現がいくつか見られた。JP1000 の教材の内容が、学習者が使用した関係節の長さや文中での位置に影響を与えた可能性がある。ただ、同教材には他の例文も出てくるが上記のように目立って類似した例は他に見られなかったため<sup>(10)</sup>、この種の節は特に応用が可能だったということは言えるだろう<sup>(11)</sup>。

また、今回は主に関係節の長さや主節内での位置に重点を置いたため、関係節の使用目的については詳しく分析しなかったが、同じ文頭に置かれる関係節でも、学習者はその負担を軽減するために文頭に持ってきていると考えられるのに対し、母語話者の関係節には修辭的な手法として文頭にしたと思われるものもいくつかあった。例 9 は朝日新聞「声」(5月22日)からの抜粋である。

- (9) [足を運ぶと、[[事前に耳にしていた]情報と異なる]印象を描く]場所があります。[3月に行った]中東のイエメンもそうでした。

この例では、最初の文で多重構造の関係節を扱った後、次の文で場所の名前を際立たせるような文頭の関係節を用いている。こういう使用例は日本語学習者には上のレベルでも見られなかった。

さらに、今回の研究のデータには含めなかったが、作文の題名にも日本語学習者と母語話者の違いが見られた。例 10 のように、関係節が意見文などの題名として使われるのが日本語母語話者には極めて典型的である。

- (10) 「水俣病の人と合唱した修学旅行」 (朝日新聞「声」5月13日)
- 「祖父が初めて語った戦争」 (同上5月22日)
- 「野宿者に元気をもらった私」 (同上5月29日)
- 「封鎖続くガザ 見過ごせぬ窮状」 (同上6月12日)

しかし、学習者による作文では、題名に関係節が使われたものは全レベルを通して一例も見られなかったので、ここで言及しておきたい。

#### 4. 結論と考察

本研究は、日本語学習者の関係節の使用頻度の低さの要因を探ることを目的として、発話データを用いた Kanno (2009) に基づき、作文中で産出された関係節の特徴を分析し、使用頻度の低さの原因に関係節の構造的な「重さ」が関与している可能性を調査した。

本研究の欠点として、分析に用いたデータのサンプルサイズが比較的小さく、統計解析を行っていないことと、学習者の作文のトピックや教室内でのインストラクションをコントロールしていないことなどが挙げられる<sup>(12)</sup>。また別の課題として、本研究では Kanno に従い、関係節の長さや構造の種類に加え主節における位置と文法的役割を中心に調査したが、修飾節内における被修飾名詞の文法的役割が関係節の使用頻度や難易度に影響を与えているかどうかを分析することも必要である<sup>(13)</sup>。さらに、統語的要因以外に、作文中での関係節の使用頻度が重文など他の構造を修辭的な目的で使用したことに影響を受けるかどうかの確認や、学習者や母語話者が関係節を談話レベルではどのように使用しているか等の質的な分析も必要であろう<sup>(14)</sup>。

これらの欠点や課題も踏まえて結果を見ると、Kanno が指摘したように、学習者が使用する日本語関係節には、発話に比べて文を組み立てるのに比

較的時間的な余裕があると考えられる作文中においても、その構造的複雑さと日本語の関係節が前置型であることが使用頻度の低さの原因になっているのではないかと考えられる。このことは、これまで検証したとおり、学習者のレベルが上がるごとに関係節が平均的に長くなり文頭に来る傾向が弱まってくること、また類型的に関係節の構造が日本語と似ている韓国語が母語の学習者には同様の傾向が少なかったことから論理づけられる。つまり、日本語学習者の産出する関係節は、その構造的複雑さや類型的特徴が関与して使用頻度が低い要因になっているということ、レベルが上がるにつれ節の長さや文中での位置を多様に使用できるようになっていく一方で、学習者の母語によって日本語関係節を産出する際の負担の度合いは異なるということが言える。

これらの結果より、日本語学習者は「重い」構成要素としての関係節を、産出時の負担を軽減するため、負担の原因となる長さを短くしたり、主節での位置を一箇所にまとめて文頭や文末の方で使ったりして対処していることがうかがえる。学習者の発話や子供の母語話者のデータとは違い、特に作文のデータでは学習者が関係節を述部名詞として文末の方でも充分使えることを示す結果となった。このことから、関係節を教える際の具体的示唆としては、節の短いものから導入して長さを徐々に増やしていったり、文頭だけでなく他の位置で使用された関係節のインプットを豊富に与えたりということが提案できる。しかし、どんな節をどんな順序や方法で教えればより効果的かを明らかにするには、さらなる実証研究が必要であろう。

結論として、日本語教師は学習者のレベルや母語を考慮に入れた上、学習者が比較的長い節が文中どの位置でも使えるよう留意して関係節の定着をはかる必要があると言える。

## 注

- \* 本稿は、2010年8月15日にカナダ日本語教育振興会の年次大会にて行った同題の口頭発表に補足・修正を加えたものである。
1. 例文中の下線部分は被修飾名詞を、[ ]は修飾節を表す。他の文献から引用した例文が異なった形式を使用している場合でも、混乱を避けるためにこの形式に統一して用いることとする。
  2. 同格節の例としては、「飛行機が落ちたニュース」など。制限・非制限用法の英語の例としては、  
Mary is going to use the computer which she bought yesterday. (制限用法)  
This computer, which Mary bought yesterday, is quite expensive. (非制限用法)  
のうち、前者はある特定のコンピュータについて制限的に情報を提供する文で、後者は聞き手がすでに知っているコンピュータについて新しい情報を提供する文だが、日本語の関係節ではこのコンマの用法のような形式上の区別は存在しない。
  3. 学習者の作文は、レベルごとに様々なトピックを与え、教室内において制限時間 (JP1000 は 50 分、JP2000 と JP3000 は 100 分) 内に制限字数 (JP1000 は 200 字、JP2000 は 800 字、JP3000 は 1000 字) 内で書かせたもので、作文中に関係節を入れるような指示は与えなかった。研究の対象にした作文のデータは、二年に渡り収集した中から関係節を含んだ作文を無作為に選んだものである。尚、母語話者の作文は長さが不規則で、400~600 字程度であった。
  4. 主語・直接目的語以外の日本語関係節の種類としては、間接目的語 (例: 「本をあげた友だち」)・斜格 (例: 「きのうとまったホテル」)・所有格 (例: 「奥さんが亡くなった先生」) 等が挙げられる。
  5. 関係節の語数の数え方や、学習者のエラーを含む関係節も対象にすることは、著者に直接確認の上、Kanno (2009) に合わせた。尚、エラーを含む節の語数を数える際、助詞等が欠落している場合はそのまま数え、「きのう読んだの本」等の誤りの「の」は数に入れなかった。
  6. 上級日本語学習者を対象とした Kanno (2009) では、発話データに現れた関係節以外のすべての節の数も集計し、学習者の節の短さが関係節特有のものであることを確認するため同格節等の長さとも比較したが、異なったレベルの学習者を対象にした本研究では、同格節等の構造は初級のレベルにはほとんど見られなかったため、この分析は割愛した。
  7. 学習者の作文の字数に対する関係節の使用頻度としては、レベルや母語によって差はあるものの、200 字あたりほぼ 1.5 個の割合であった。
  8. ただし、本研究の結果では少数ではあるが多重構造等の関係節が見られたのに対し、Kanno (2009) は上級学習者でも発話の中で同様の関係節は全く使用されなかったことを報告している。このことから、発話と作文では関係節の産出に多少の違いがあると考えられる。
  9. 大関 (2008) では、「文」の骨格をなすものが何であるかを明確にした上で関係節の位置を識別し、「文頭」「中央埋め込み」として分類している。
  10. 「きのうひこうきの中で見たえいがはおもしろかったよ。」は関係節の被修飾名詞の主節内での役割は主語、主節内での位置は文頭、節の長さは 7 語

であるが、教材の会話文に出てくる関係節を含む例文は上記も含めて全部で 15 あり、その中で、主節内での役割は主語が 6 例、目的語が 2 例、斜格が 5 例、述部名詞が 2 例ある。また、例文は節が文頭に来るものが多いが、長さは 2 語から 8 語までいろいろである。尚、JP1000 以外のコースの教材では特に「関係節」であることを明確にして例文を紹介してはならず、今回の調査の結果に直接的影響はないと思われる。

11. 同様に大関（2008）は、この種の「過去・未来の出来事を表す」日本語の名詞修飾節は、自然習得が中心の学習者にはレベルが進んでもほとんど使用されないのに対し、教室内学習中心の学習者には少数ながら早い時期から現れる例もあることを報告し、日本語の教科書等で使われる典型的な例文の影響がある可能性を指摘している。
12. 学習者の作文のトピックは、JP1000 は自分の趣味や好きな場所、身の回りのできごとなどを説明させる内容、JP2000 は旅行や大学生活に関する話題、JP3000 はそれ以前に教室活動として行われたグループ討論で学生が選んだ数種類のトピック（例としては「安楽死は是か非か」「ビデオゲームの子供への影響」「赤ちゃんポストはあった方がよいか」等）の中から、自分が参加しなかったものを一つ選択させて書かせたもの。
13. 修飾節と被修飾名詞のいわゆる「格関係」からの関係節の分析は、日本語習得の研究でも比較的盛んに行われている。しかし、異なった種類の関係節の使用頻度や習得難易度に関しては、本調査と同様のデータを用いて行った筆者自身の別の研究（Yabuki-Soh, 2009）も含め、日本語の分野では一定した結果は得られていない。
14. 例えば、節や被修飾名詞が新情報か旧情報か、また修飾節が主節の理由づけになっているかなど、談話レベルでの関係節の機能が主節での位置にどう影響するかを分析することもできる。

## 参考文献

- 大関浩美（2008）『第一・第二言語における日本語名詞修飾節の習得過程』くろしお出版
- 齋藤浩美（2002）「連体修飾節の習得に関する研究の動向」『言語文化と日本語教育 増刊特集号 第二言語習得・教育の研究最前線—あすの日本語教育への道しるべ—』45-69 お茶の水女子大学日本言語文化学会
- 寺村秀夫（1992）『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編』くろしお出版
- 増田真理子（2000）「日本語母語話者と学習者のストーリーテリング文を比較する—4 コマ漫画のストーリー内容を書いたテキストの分析から—」『多摩留学生センター教育研究論集』2, 13-25

- Arnold, Jennifer E., Wasow, Thomas, Losongco, Anthony, & Ginstrom, Ryan. (2000). Heaviness vs. newness: The effects of structural complexity and discourse status on constituent ordering. *Language* 76 (1), 28-55.
- Kanno, Kazue. (2009). The effect of 'weight' of the relative clause construction in L2 Japanese production. *Journal CAJLE* 10, 127-142.
- Ota, Norio. (2010). Lecture notes: Lesson 19 conversation. In *AP/JP1000 6.0 Elementary modern standard Japanese*. Retrieved June 12, 2010, from the Japanese Studies Program @ York University web site: <http://buna.arts.yorku.ca/japanese/ejlt/ejcv19j.pdf>
- Ozeki, Hiromi, & Shirai, Yasuhiro. (2007). The consequences of variation in the acquisition of relative clauses: An analysis of longitudinal production data from five Japanese children. In Y. Matsumoto, D. Oshima, O. Robinson & P. Sells (Eds.), *Diversity and universals in language: Perspectives and Implications*, 243-270. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Schachter, Jacquelyn. (1974). An error in error analysis. *Language Learning* 24 (2), 205-214.
- Yabuki-Soh, Noriko. (2009). Japanese noun-modifying constructions in L2 learners' writing. Paper presented at the annual international conference of the Japanese Society of Language Sciences, Tokyo Denki University, Tokyo.
- Yamashita, Hiroko. (2002). Scrambled sentences in Japanese: Linguistics properties and motivations for production. *Text* 22 (4), 597-633.